

ワーキンググループのみである。

文部科学省は、今年度から学校健康診断の見直しを行うため「学校における持続可能な保健管理の在り方に関する調査検討会」を設置し、学校の健康診断の検査の項目の意義やプライバシーへの配慮等の実施方法、保健管理にかかる教職員の負担、学校医の確保などについて3年間かけて検討することになっている。議論の進め方としては、学校における健康診断の今日的意義の再確認、児童生徒等の健康課題の変化、学校医等の確保が困難にある状況、学校における働き方改革等を踏まえた実施項目・実施方法、児童生徒等のプライバシーへの配慮等適切な実施方法などの健康診断の実施のあり方、養護教諭や学校医等学校における保健管理を担うものの負担軽減などとなっており、今年7月17日第2回の検討会が行われた。また、見直しに必要な資料作成のため、日本学校

保健会に「保健教育・保健管理に関する調査事業」「事後措置等における学校と医療機関等との連携に係るモデルケース作成事業」を委託している。

日本医師会では、学校健康診断を再検討するワーキンググループを立ち上げ、前述の調査検討会と情報共有しつつ、耳鼻科、眼科の学校健診における課題、脊柱側弯症検診における機器導入、学校健康診断情報管理体制について（DX化、PHR）等検討を行っている。

今後の課題として、教職員の健康管理、児童生徒のいじめ・不登校・自殺、運動能力・運動習慣などがあり、現在文科省との交渉案件として、教職員が49名以下の学校における教職員の健康管理体制、学習指導要領における健康教育のあり方などがある。

【報告：河村 一郎】

閑話求題

夏の異常な暑さをめぐって

下関市 小田 哲郎

「今日も暑いですね！調子はどうですか？」

最近外来で最初に声がけしている言葉だ。

ここ数年、日本の夏は「暑い」を乗り越えて「危険な暑さ」と表現されるようになった。かつては真夏日（30℃以上）で汗をかきながらも「夏らしい」と笑っていたものだが、いまや35℃を超える猛暑日が当たり前になり、40℃に迫る地域すら珍しくない。

外に出れば、アスファルトがフライパンと化し、信号待ちの間に足元で目玉焼きが作れそうな勢いだ。

コンビニに入れば極楽浄土。冷房が効いた店内で「ああ…これがオアシスか」と感涙し、つい本来買う予定もなかったガリガリ君を3本も買ってしまふ。レジ袋に入れられたそれは、もはや戦利品。家まで持ち帰れるかどうかは運次第。

そして毎年恒例、電力会社との知恵比べも始まる。冷房を28℃にするか、命を取るか。節電か、文明か。扇風機を首振りにして「生きる、私」と自分に言い聞かせる夜は、まるで修行僧。

ニュースでは「観測史上最高気温を更新」と耳にするが、もう更新されすぎて気温がアプリのバージョンみたいになってきました。「夏 Ver.2025.08.1(ホットフィックス版)」とでも名付けたい。

それでも、ふと思う。

日本人は昔から「暑いですね」が万能の挨拶だった。つまり異常気象が私たちに与えてくれたのは、全国民の共通話題という、究極のコミュニケーションツールだったのかと。

ただし来年はもう少しクールな話題にしてほしい、と空を見上げてお願いする今日この頃だ。